

森林生態系の管理目標に関する現状把握・ 評価について (令和4年度の実施結果)

目次

1. 令和4年度の実施内容	1
①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被度の回復（調査継続中）	3
②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値である植生垂直分布を形成する植物種の多様性の回復.....	5
③ヤクシカの嗜好性植物種の更新	7
④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全	9
2. 今後の取組予定.....	11

林野庁 九州森林管理局

1. 令和4年度の実施内容

本年度は、表1の森林生態系の管理目標のうち、①の目標については植生保護柵6箇所にて現地調査を実施し、現状把握及び評価を行った。②～④の目標については「屋久島世界遺産地域モニタリング計画」等により関係機関が実施した各種調査結果等をベースに現状把握及び評価を行った。

表1 森林生態系の管理目標と令和4年度の現状評価の実施地域

森林生態系の管理目標	現状把握・評価予定地域
①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被度の回復	植生保護柵6箇所(図1) (カンカケ 200m、カンカケ 400m、カンカケ 700m、ヒズクシ、愛子岳 400m、中間7)
②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値である植生垂直分布を形成する植物種の多様性の回復	モニタリング計画による中央部地域の植生垂直分布調査実施箇所のうち4箇所(図2) (1200m、1400m、1600m、1800mの4箇所にある詳細調査プロット)
③ヤクシカの嗜好性植物種の更新	
④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全	モニタリング計画による本年度実施予定の国内希少種等の調査地域(モニタリングサイト)

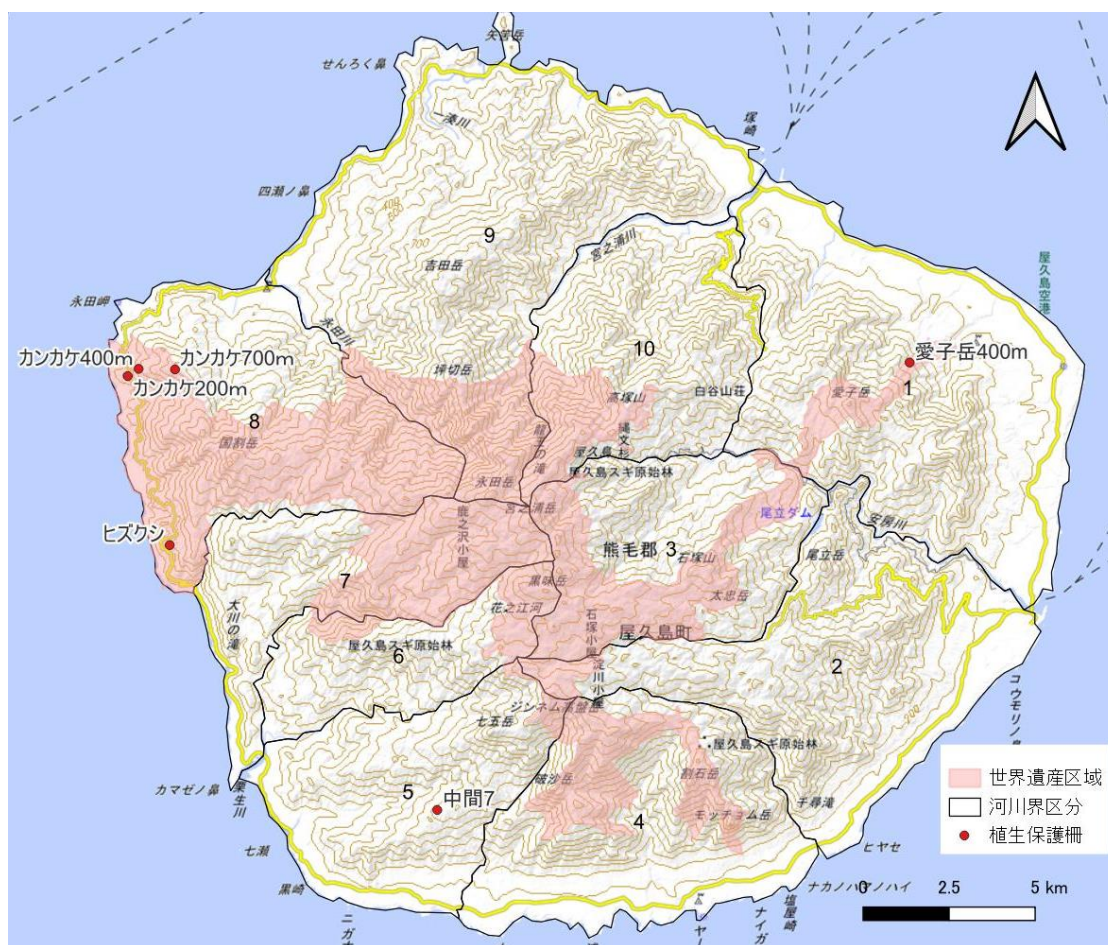


図1 植生保護柵調査予定箇所(赤字の地点)

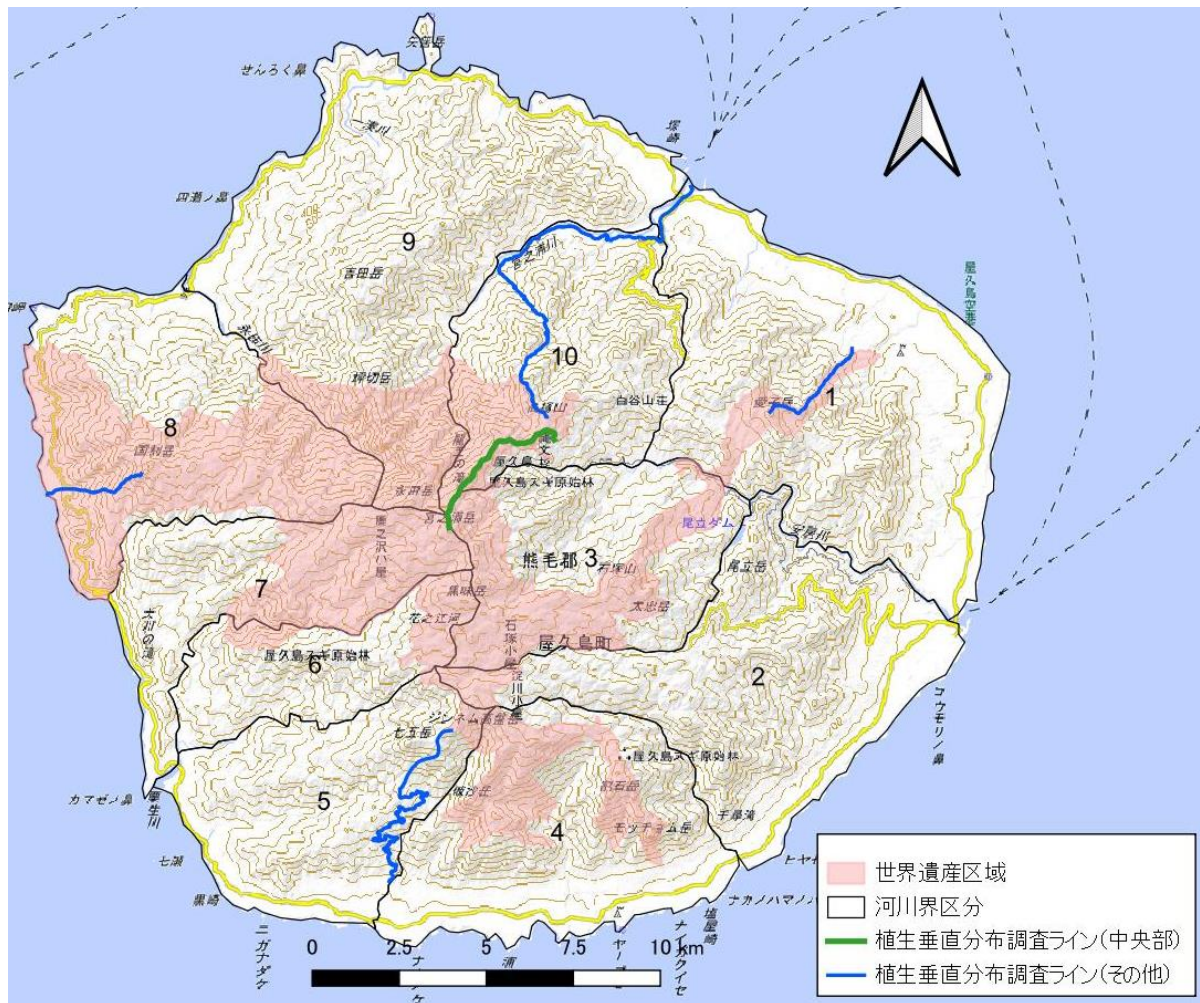


図 2 現状評価を実施する屋久島中央部地域の植生垂直分布調査実施箇所（緑色部分）

①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被度の回復(調査継続中)

評価指標：シダ植物の被度

評価基準：植生保護柵外のシダ植物の被度を柵内の50%を目安として回復させる。

把握方法：植生保護柵内外の植生調査においてシダ植物の被度を百分率(%)で記録し、柵内外の違いを定量的に比較する。

本年度は、植生保護柵6箇所(カンカケ200m、カンカケ700m、ヒズクシ、愛子岳400m、愛子岳205林班、中間7)で現地調査を実施し(図1)、確認された各シダ植物種の柵内外の被度の違いを比較して現状把握及び現状評価を行った。なお柵内・柵外にそれぞれ調査プロットが複数あるが、柵内・柵外で同一種が複数プロット確認された場合にはそれぞれの最大被度同士を比較した。

なお、過年度の被度については、2018年度以前はブラウン・ブランケの被度区分で記録しているため、便宜的に各区分の最大値をとり、被度5→100%、被度4→75%、被度3→50%、被度2→25%、被度1→10%、被度+→1%と換算した。

保護柵設置箇所別の調査結果は次のとおりである。

【カンカケ200m・400m・700m】

カンカケの植生保護柵は河川界区分8に位置し、標高200m~700mにかけて6箇所あり、本年度はカンカケ200m、カンカケ400m、カンカケ700mの3箇所の植生保護柵において調査を実施した。

カンカケ200mでは、柵内で4種、柵外で2種のシダ植物が確認され、うちイシカグマ、希少種A、マメヅタは柵内のみ、タマシダは柵外のみでの確認であった(表2)。柵内で確認された4種全てが目標に至っていない状況であった。また柵外で確認されているホソバカナワラビが2019年から半分程度の被度に減少した

表2 カンカケ200mにおける柵内外のシダ植物の被度

種名	調査年度											
	2010		2011		2012		2016		2019		2022	
	柵内	柵外	柵内	柵外	柵内	柵外	柵内	柵外	柵内	柵外	柵内	柵外
イシカグマ							10%				3%	
希少種A									6%		6%	
タマシダ										1%		1%
ナチシダ								10%		消失		
ホソバカナワラビ	25%	10%	25%	10%	10%	10%	25%	10%	55%	9%	50%	5%
マメヅタ	1%	1%	1%	1%	1%	消失	1%		10%		3%	
確認種数	2	2	2	2	2	1	3	2	3	2	4	2
目標未達種数	1		1		1		3		3		4	

※目標に至っていない部分を青色着色で示した。

カンカケ400mおよびカンカケ700mでの調査結果については現在整理、集計中のため、2023年度第1回ヤクシカWGでの報告を予定する。

【中間7】

中間の植生保護柵は河川界区分5に位置し、本年度は標高約510mに位置する中間7の植生保護柵において調査を実施した。

【公表用】

中間7では、柵内で12種、柵外で7種が確認され、10年前の前回調査と比較すると柵内で1種増加し、柵外で1種減少した。柵内確認種12種のうち9種が柵内のみの確認であり（表3）、柵内確認種12種のうち11種が目標に至っていない状況であった。

表3 中間7における柵内外のシダ植物の被度

種名	調査年度					
	2011		2012		2022	
	柵内	柵外	柵内	柵外	柵内	柵外
オオキジノオ	10%	10%	10%	10%	20%	1%
カツモウイノデ				10%		1%
キジノオシダ					1%	
キッコウハグマ					1%	
コウヤコケシノブ	10%		10%		1%	
希少種B	10%		10%		5%	
コバノイシカグマ						1%
シシガシラ	1%		10%		3%	
タカサゴキジノオ	10%	10%	10%	10%	消失	1%
希少種C	10%		10%		20%	
トウゴクシダ	10%	1%	10%	1%	3%	
ヌトヲノオ		1%		1%		消失
ノキシノブ					1%	
ヘゴ			1%		消失	
ホコザキベニシダ			10%		15%	
ホソバカナワラビ		50%		50%		25%
ホソバコケシノブ	25%		25%		15%	
マメヅタ	1%	1%	消失	1%		1%
ミヤマノコギリシダ	10%	50%	10%	50%	10%	70%
確認種数	10	7	11	8	12	7
目標未達種数	6		8		11	

【ヒズクシ】

ヒズクシの植生保護柵の調査結果については、現在整理・集計中のため、2023年度第1回ヤクシカWGでの報告を予定する。

【愛子岳 400m】

愛子岳 200mの植生保護柵の調査結果については、現在整理・集計中のため、2023年度第1回ヤクシカWGでの報告を予定する。

②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値である植生垂直分布を形成する植物種の多様性の回復

評価指標：植物種数

評価基準：各標高帯において 2000 年代の確認植物種数に回復させる。

把握方法：植生垂直分布調査結果から各標高帯の草本層の植物種名・種数を抽出して 2000 年代の状況と比較する。また、種数だけでなく 2000 年代の調査以降に消失した種の回復（再出現）状況も確認する。

本年度は、九州森林管理局計画課の事業において屋久島中央部地域の各標高帯（1200m、1400m、1600m、1800m）で植生垂直分布調査を実施したため（図 2）、その詳細調査プロットでの結果を抽出し、屋久島中央部地域の植物種数の変化傾向の把握と本目標の現状評価を行った。

【中央部地域の現状評価】

中央部地域については、2017 年調査時点において、1200m～1600m の 3 標高帯において種数が増加し、回復傾向にあった。

今回 2022 年調査結果を追加した結果、4 標高帯とも引き続き種数が増加し、全ての標高帯において調査開始当初の 2002 年度の種数を超え目標を達成していることが確認できた（図 3）。

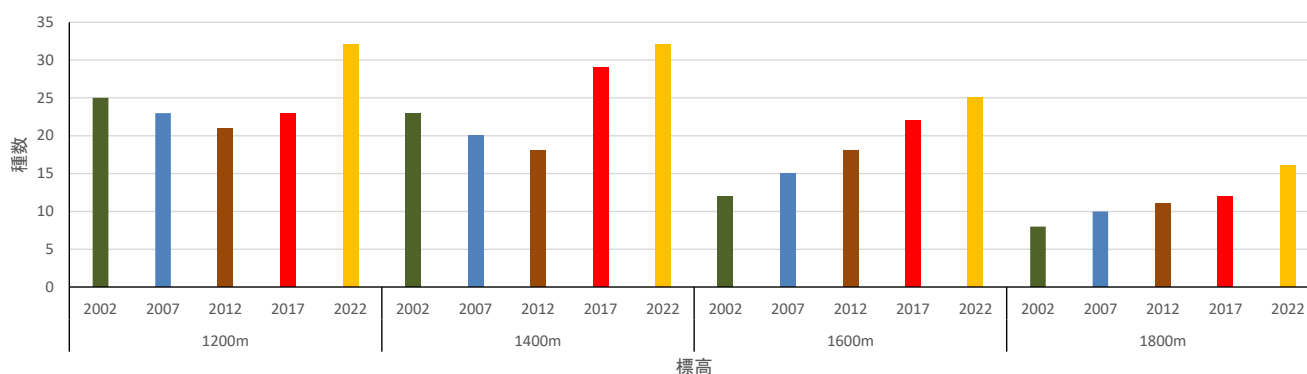


図 3 中央部地域における標高別の植物種数の変化

【中央部地域の種別の減少・回復傾向】

中央部全体での減少・回復傾向にある種を見ると、2002 年に確認され、2022 年までに消失した植物種は 15 種であった。嗜好性の高い種はサンショウソウのみであったが（表 4）、環境省 RL(2020)掲載種が 2 種あった。一方、2022 年の回復種は 9 種であった（表 5）。

表 4 中央部の詳細プロット全体での消失種（2002 年確認後 2022 年までに消失）：15 種

ヤクシカの嗜好性	種名
目標③の嗜好種	サンショウソウ*
★(食べる)	イヌガシ
不嗜好	フタリシズカ
未評価	希少種 A、オオクボシダ、キジノオシダ、コバナタツナミ、サルトリイバラ、シキミ、シノブ、ノキシノブ、ベニシダ、マルバフユイチゴ、希少種 B、ヤクシマスミレ

表 5 中央部の詳細プロット全体での回復種（2002 年確認後 1 度消失し 2022 年までに再確認）：9 種

ヤクシカの嗜好性	種名
★★★(特に好む)	リョウブ
未評価	コハウチワカエデ、コメススキ、タンナサワフタギ、ツルアジサイ、ヒカゲツツジ、マイヅルソウ、ヤクシマノギラン、ヤクシマヒメバライチゴ

* 後述の目標③の嗜好種

全体では回復種よりも消失種の方が多く、特に標高 1200m、1400m では消失種数が回復種数の 2 倍以上となっており、これらの標高帯での種数の増加は新規確認種(新規加入)による影響が大きい。今後はこれらの箇所の消失種の回復状況を注視していく必要がある。

【中央部地域の新規確認種】

また、2022 年になり中央部で初めて確認された種は 11 種あり(表 6)、環境省 RL 掲載種が 2 種あった。

表 6 中央部の詳細プロット全体での新規確認種（2022 年になり初めて確認）：12 種

ヤクシカの嗜好性	種名
★★★(特に好む)	ウラジロガシ
不嗜好	ユノミネシダ
未評価	サンカクヅル、希少種 C、スズコウジュ、ソヨゴ、タカサゴキジノオ、トウゴクシダ、ヒメウマノミツバ、ヤクシマイトスゲ*、ヤクシマコケリンドウ、希少種 D

*2017 年に新規確認されたイトスゲがヤクシマイトスゲの誤同定であった可能性がある。

なお、2017 年には中央部で 21 種が初めて確認されたが、2022 年には 8 種が消失している(表 7)。このため、今回の新規確認種が、一時的な出現ではなく、5 年後のモニタリング時に継続して確認できるか注視する必要がある。

表 7 中央部の詳細プロット全体での 2017 年新規確認種（21 種）の 2022 年の消失状況

ヤクシカの嗜好性	種名
★(好む)	ハリギリ
未評価	アオスゲ、イトスゲ→消失*、オオキジノオ、カナクキノキ、希少種 E、希少種 F、希少種 G→消失、ツクバネソウ、ツタ→消失、トウゲンバ→消失、希少種 H、希少種 I、ホコザキベニシダ、ミヤマノコギリシダ→消失、ヤクシマサルトリイバラ、ヤクシマツルリンドウ→消失、ヤクシマナミキ、希少種 J、ヤマソテツ→消失、ヤマボウシ

*2017 年に新規確認されたイトスゲがヤクシマイトスゲの誤同定であった可能性がある。

③ヤクシカの嗜好性植物種の更新

評価指標：嗜好性植物種の種数、被度

評価基準：ヤクシカの嗜好性植物種の確認種数、被度を過年度から回復または維持増加させる。

把握方法：嗜好性植物種について生育の更新状況を把握しやすい草本層の出現状況及び被度の経年的な変化を確認する。

本年度は、②と同様、九州森林管理局計画課の事業における屋久島中央部地域の植生垂直分布調査結果から、被度を記録している詳細調査プロットにおいて表 8 の嗜好性植物種を抽出して経年的な変化を確認し、屋久島中央部地域の本目標の現状について評価を更新した。

なお、過年度の被度については、2018 年度以前はブラウン・ブランケの被度区分で記録しているため、便宜的に各区分の最大値をとり、被度 5→100%、被度 4→75%、被度 3→50%、被度 2→25%、被度 1→10%、被度+→1%、被度 r→0.5%と換算した。

表 8 本目標で対象とするヤクシカの嗜好性植物種

分類群	科	種名	備考
シダ植物	リュウビンタイ	リュウビンタイ	
	メシダ	ノコギリシダ属の嗜好性種 (コクモウクジャク、ヒロ ハノコギリシダ、シロヤマ シダ、シマシロヤマシダ)	・シマシロヤマシダは鹿児島県 RL 情報不足
	ヘゴ	ヘゴ	・屋久島の森林植生の特徴種
草本植物	ラン	ツルラン	・屋久島の森林植生の特徴種 ・環境省 RL 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ・鹿児島県 RL 絶滅危惧Ⅱ類
	キク	カンツワブキ	・固有種 ・鹿児島県 RL 準絶滅危惧
		ヤクシマアザミ	・固有種 ・鹿児島県 RL 準絶滅危惧
	アカネ	サツマイナモリ	
	イラクサ	サンショウソウ	
	シオデ	ヒメカカラ	・環境省 RL 準絶滅危惧 (NT) ・鹿児島県 RL 絶滅危惧Ⅱ類
木本植物	クワ	イヌビロ	
	ブナ	マテバシイ	・萌芽更新種 ・固有種 (但し、広く国内分布)
		アカガシ	・萌芽更新種
	ミカン	カラスザンショウ	
		ヤクシマカラスザンショウ	・固有種 ・鹿児島県 RL 準絶滅危惧
	ムクロジ	ヤクシマオナガカエデ	・固有種
	クスノキ	ヤブニッケイ	
		ホソバタブ	

【中央部地域の現状評価、種別の減少・回復傾向】

中央部地域ではヤクシカの嗜好性植物種としてサンショウソウが 2002 年度と 2007 年度調査において、標高 1200m と標高 1400m で確認されたのみであり、いずれの標高帯においても消失した状況が続いている（表 9）。

このため、目標を達成できていないが、モニタリング範囲が全体的に高標高であり、調査開始当初から本目標で指標としている嗜好性種が少ないことが課題である。定量的な評価のためには高標高域での指標種の追加も必要と考えられる。

表 9 中央部における嗜好性植物種の被度（%）の変化

種名	1200m						1400m					
	2002	2007	2012	2017	2022	変化	2002	2007	2012	2017	2022	変化
サンショウソウ	1%	1%					1%	1%				
確認種合計	1	1	0	0	0		1	1	0	0	0	

（参考）中央部地域におけるこれまでの確認種で嗜好性の比較的高い種

イヌガシ、ウラジロガシ、サカキ、サンショウソウ、スギ、ナナカマド、ハリギリ、ホウロクイチゴ、ヤクシマダケ、ヤマグルマ、リョウブ

④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全

評価指標：希少種・固有植物種の生育確認箇所数・個体数

評価基準：既往調査地において絶滅のおそれのある固有植物種等の生育確認箇所数・生育個体数を過年度から維持増加させる。

把握方法：環境省事業で調査対象種として選定された絶滅のおそれのある固有植物種等 267 種のうち、既往調査で確認されている 91 種を指標種とし（表 10）、当該事業の調査結果から指標種の確認地点数・確認個体数について経年的な変化を確認する。

本年度は、環境省事業において絶滅のおそれのある固有植物種等の調査がモニタリングサイト 107 地点のうち、17 地点でモニタリングが実施された。このため、この 17 地点について、地生種と着生種に分け、前回調査（H28・H29）と比較した。また、モニタリングサイトの概略位置や経年変化の詳細については、環境省報告資料 3-④を参照。

生育確認地点数を見ると、地生種全体については、前回調査も今回調査も 17 地点中同じ 16 地点で確認されたが、その種数は 2 地点で 1 種ずつ減少、2 地点で 1 種ずつ増加していた。着生種全体については、前回調査も今回調査も 17 地点中同じ 8 地点で確認され、その種数は 1 地点で 1 種増加した。

以上より、調査対象種全体の確認地点数については、過年度の状況を維持しているが、確認地点ごとに確認種数を見ると減少地点もあり、これらの地点については注意する必要がある。

次に生育個体数を見ると、地生種については、確認された 16 地点中 5 地点で減少し、7 地点で増加した。着生種については、確認された 8 地点中 2 地点で減少し、1 地点で増加した。

以上より、調査対象種の個体数については、地生種で 5 地点、着生種で 2 地点において減少しており、これらの地点では目標に至っていない状況であった。

表 10 本目標で対象とする絶滅のおそれのある固有植物種等のリスト（91 種）

No.	分類群	科名	種名	学名	環境省 RL2020	固有種	地生/ 着生
1	シダ 植物	ヒカゲノカズラ	ヒモスギラン	<i>Lycopodium fargesii</i>	CR		着生
2			ヨウラクヒバ	<i>Lycopodium phlegmaria</i>	EN		着生
3			ヒモラン	<i>Lycopodium sieboldii</i>	EN		着生
4		キジノオンダ	ヤマソテツ	<i>Plagiogyria matsumureana</i>			地生
5			シマヤマソテツ	<i>Plagiogyria stenoptera</i>	CR		地生
6		コバノイシカグマ	ホソバコウシュンシダ	<i>Microlepia obtusiloba</i> var. <i>angustata</i>	CR	固有変種	地生
7		シノブ	シノブ	<i>Davallia mariesii</i>			着生
8			キクシノブ	<i>Humata repens</i>	VU		着生
9		イノモトソウ	トゲハチジョウシダ	<i>Pteris setuloso-costulata</i>	EN		地生
10			ヒカゲアマクサシダ	<i>Pteris tokioi</i>	EN		地生
11		チャセンシダ	オオタニワタリ	<i>Asplenium antiquum</i>	VU		着生
12			フササジラン	<i>Asplenium griffithianum</i>	CR		着生
13		ツルキジノオ	ヒロハアツイタ	<i>Elaphoglossum tosaense</i>	VU		着生
14			アツイタ	<i>Elaphoglossum yoshinagae</i>	VU		着生
15		オンダ	台湾ヒメワラビ	<i>Acrophorus nodosus</i>	VU		地生
16			ヤクシマカナワラビ	<i>Arachniodes cavalerii</i>	VU		地生
17			ムカシベニシダ	<i>Dryopteris anadroma</i>	CR	固有種	地生

【公表用】

No.	分類群	科名	種名	学名	環境省 RL2020	固有種	地生/ 着生	
18			ホウライヒメワラビ	<i>Dryopteris hendersonii</i>	EN		地生	
19			ムラサキベニシダ	<i>Dryopteris purpurella</i>	CR		地生	
20			コスギイタチシダ	<i>Dryopteris yakusilvicola</i>	NT		着生	
21			コモチイノデ	<i>Polystichum eximium</i>	VU		地生	
22		ヒメシダ	ヒメミゾシダ	<i>Stegnogramma gymnocarpa</i> ssp. <i>amabilis</i>	NT		着生	
23			シマヤワラシダ	<i>Thelypteris gracilescens</i>	CR		地生	
24			台湾ハリガネワラビ	<i>Thelypteris uraiensis</i>	EN		地生	
25		メシダ	キリシマヘビノネゴザ	<i>Athyrium kirisimaense</i>			地生	
26			ヤクイヌワラビ	<i>Athyrium masamunei</i>	CR	固有種	地生	
27			ヒメホウビシダ	<i>Athyrium nakanoi</i>	VU		着生	
28		メシダ	サカバインヌワラビ	<i>Athyrium reflexipinnum</i>	EN		地生	
29			ホウライイヌワラビ	<i>Athyrium subrigescens</i>	EN		地生	
30			シマイヌワラビ	<i>Athyrium tozanense</i>	CR		地生	
31			ヤクシマタニイヌワラビ	<i>Athyrium yakusimense</i>	CR	固有種	地生	
32			ホソバシケチシダ	<i>Cornopteris fluviialis</i>	EN		地生	
33			アオイガワラビ	<i>Diplazium kawakamii</i>	CR		地生	
34		ウラボシ	台湾クリハラン	<i>Colysis hemionitidea</i>	VU		着生	
35			ヤクシマウラボシ	<i>Crypsinus yakusularis</i>	EN		地生	
36			台湾アオネカズラ	<i>Polypodium formosanum</i>	EN		着生	
37		離弁 花類	キンボウゲ	ヤクシマカラマツ	<i>Thalictrum filamentosum</i> var. <i>yakusimense</i>	VU	固有変種	着生
38			ウマノスズクサ	オニカンアオイ	<i>Heterotropa hirsutisepala</i>	VU	固有種	地生
39			オトギリソウ	ヤクシマコオトギリ	<i>Hypericum yakusimense</i>		固有変種	地生
40			ユキノシタ	ヤクシマショウマ	<i>Astilbe glaberrima</i>		固有変種	地生
41				ヒメチャルメルソウ	<i>Mitella doiana</i>		固有種	着生
42		合弁 花類	ツツジ	ヤクシマヨウラクツツジ	<i>Menziesia yakushimensis</i>	EN	固有種	地生
43				ヤクシマシャクナゲ	<i>Rhododendron degronianum</i> ssp. <i>yakusimanum</i>		固有変種	地生
44				アクシバモドキ	<i>Vaccinium yakushimense</i>	VU	固有種	着生
45			リンドウ	ヤクシマコケリンドウ	<i>Gentiana yakumontana</i>		固有変種	地生
46				ヤクシマリンドウ	<i>Gentiana yakushimensis</i>	EN	固有種	地生
47				ハナヤマツルリンドウ	<i>Tripterispermum distylum</i>	EN	固有種	地生
48			アカネ	ヤクシマムグラ	<i>Galium kantschaticum</i> var. <i>yakusimense</i>		固有変種	地生
49			シソ	ヤクシマシソバタツナミ	<i>Scutellaria kuromidakensis</i>	VU	固有変種	地生
50			オオバコ	ヤクシマオオバコ	<i>Plantago asiatica</i> var. <i>yakusimensis</i>		固有変種	地生
51			キク	ヤクシマウスユキノソウ	<i>Anaphalis sinica</i> var. <i>yakusimensis</i>	CR	固有変種	地生
52				ヤクシマコウモリ	<i>Cacalia hastata</i> ssp. <i>orientalis</i> var. <i>yakushimensis</i>	NT	固有変種	地生
53				ヤクシマヒヨドリ	<i>Eupatorium yakushimense</i>	VU	固有種	地生
54	ヤクシマニガナ			<i>Ixeris dentata</i> f. <i>parva</i>		固有種	地生	
55	イッスンキンカ			<i>Solidago virgaurea</i> var. <i>minutissima</i>		固有変種	地生	
56	単子葉 植物		ラン	タネガシマムヨウラン	<i>Aphyllorchis montana</i>	EN		地生
57		ヤクシマラン		<i>Apostasia nipponica</i>	EN		地生	
58		マメヅタラン		<i>Bulbophyllum drymoglossum</i>	NT		着生	
59		ムギラン		<i>Bulbophyllum inconspicuum</i>	NT		着生	
60		ミヤマムギラン		<i>Bulbophyllum japonicum</i>	NT		着生	
61		キリシマエビネ		<i>Calanthe aristulifera</i> var. <i>kirishimensis</i>	EN		地生	
62		ダルマエビネ		<i>Calanthe fauriei</i>	VU		地生	
63		ツルラン		<i>Calanthe furcata</i>	VU		地生	

【公表用】

No.	分類群	科名	種名	学名	環境省 RL2020	固有種	地生/ 着生
64			トクサラン	<i>Calanthe gracilis var. venusta</i>	NT		地生
65			レンギョウエビネ	<i>Calanthe lyroglossa</i>	VU		地生
66			カンラン	<i>Cymbidium kanran</i>	EN		地生
67			ナギラン	<i>Cymbidium lancifolium</i>	VU		地生
68			キバナノセッコク	<i>Dendrobium tosaense</i>	EN		着生
69			オオオサラン	<i>Eria corneri</i>	EN		着生
70			オサラン	<i>Eria reptans</i>	VU		着生
71			ヤクシマヤツシロラン	<i>Gastrodia albida</i>	CR		地生
72			ツリシュスラン	<i>Goodyera pendula</i>			着生
73			シマシュスラン	<i>Goodyera viridiflora</i>	VU		地生
74			ヒメクリソラン	<i>Hancockia japonica</i>	CR	固有種	地生
75			カゲロウラン	<i>Hetaeria agyokwana</i>	NT		地生
76			ヤクシマアカシュスラン	<i>Hetaeria yakusimensis</i>	VU		地生
77			ウスギムヨウラン	<i>Lecanorchis kiusiana</i>	NT		地生
78			ヤクムヨウラン	<i>Lecanorchis nigricans var. yakusimensis</i>	CR		地生
79			タブガワムヨウラン	<i>Lecanorchis tabugawaensis</i>		固有種	地生
80			アワムヨウラン	<i>Lecanorchis trachycaula</i>	CR		地生
81			ミドリムヨウラン	<i>Lecanorchis virellus</i>	CR		地生
82			チケイラン	<i>Liparis plicata</i>	VU		着生
83			フタバラン sp.	<i>Listera sp.</i>			地生
84			ムカゴサイシン	<i>Nervilia nipponica</i>	EN		地生
85			ガンゼキラン	<i>Phaius flavus</i>	VU		地生
86			ヤクシマチドリ	<i>Platanthera ophrydioides var. amabilis</i>	EN	固有種	地生
87			ナガバトンボソウ	<i>Platanthera tipuloides var. linearifolia</i>	VU		地生
88			コオロギラン	<i>Stigmatodactylus sikokianus</i>	VU		地生
89			ヒメトケンラン	<i>Tainia laxiflora</i>	VU		地生
90			ヤクシマネッタイラン	<i>Tropidia nipponica</i>	EN		地生
91			ヤクシマヒメアリドオシラン	<i>Vexillabium yakushimense</i>	NT		地生

2. 今後の取組予定

令和5年度以降も、モニタリングが実施された箇所において管理目標の現状と評価を更新し、目標の現状把握や評価結果から注意すべき箇所を抽出する。

また、目標②については、今回の中央部以外も含めて目標が達成できている地域が多いものの、消失種の再確認よりも新規出現種による要因が大きいと、より詳細な現状把握や評価ができるような整理・分析方法等を検討することも必要と考えられる。